

空の花 《チェロ・フィナーレ》 ただいま更新停止中

雪宮春夏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

イタリアンマフィア界では、ひっそりと崩壊の足音が聞こえていた。

ボンゴレファミリー十代目、沢田綱吉は彼の守護者と、周囲にいた筈の仲間達と不自然に空いてしまった距離に、しかし何も出来ずに戸惑うばかりだった。

そんな彼の前に現れた、一人の存在。その出会いがもたらすものは……！

春夏の知識は原作のコミックのみです。幼少期にアニメも見たはずなのに、その内容は覚えていないという体たらく。

見る予定は今の所……未定。

目次

そもそも始まり	1
一章 怪盗 空花 《チエロ・フィナーレ》	
prolog	6
#1 自称神様の勅命	10
#2 元家庭教師の来訪	16

そもそももの始まり

その髪……濃き紫の長きにして

「いたぞーあそこだっ!!」

屋根の上に立つその人物を、この屋敷の所有者をボスと仰ぐファミリー達が取り囲んでいた。

視界を埋め尽くさんばかりに集まる黒服の男達を見下ろしながら、追い詰められている筈の人物はふっと唇を緩ませる。

その眼……高純度の大空の炎の如く、鮮やかな橙。

「バアカ。ハマったのはそっちだよ!」

声に出して一瞬。トンと軽い跳躍で……その人物は窓から飛び降りる。

それを捉えようと落下地点へと駆け寄る男達にはくそ笑み、懐に手を伸ばす。

その容……華のように可憐にして。

「《清め焰捉えて強者を阻め……!》」

その唄……虹ように儂い。

手の中にあつたのは、鮮紅色のガラス製と見まごう程に透き通った剣。

細身の刀は東洋系に感じられるが、鏢の中央に埋め込まれている深紅の宝石が、これを西洋系の大剣の様にも錯覚させる。

しかし、その剣を前にした男達にはそのような思考をする暇さえ与えられなかった。

その人物が地面に着地するよりも先に突き刺さられた剣からその瞬間、炎が迸ったのだ。

その炎は大地を駆け、まるで意志を持っているかのように次々と男達を拘束していく。

「な……何だこれ!? ロープみてえに硬え!」

一人の男が驚愕に顔を歪めるのを皮切りに、身動きする男達が、一人、また一人と呻き声をあげる。

「悪いが、そこでジツとしていてくれ……」

顔をあげたその人物はそう一言だけを残し、己の目的を果たすために歩みを進めた。

カチャリと、扉を開けた先に見つけた人物を見て、橙の目を伏せる。

「この……不届き者が! 俺の絵は渡さんぞ!」

その相手は、表に屯していた黒服の男達のボスだ。

「知っている奴か?」

耳元で囁かれた相棒の言葉に頷く。

「ボンゴレの同盟ファミリーだ。……俺の代で調印した人で……俺を孫のように可愛がってくれた。身寄りと呼べる身寄りがいないからと言って」

相棒の言葉に答える声は平淡とした声音だ。小声なのも相まって、彼ら以外の人間には何を話しているのかは分からないだろう。

「な……何だお前達は……誰か! 誰かいないのか!!」

己に迫る危険は分かるのか、声を上げて外にいるファミリーの者達を呼び寄せようとする。

「大丈夫ですよ。ドン」

張り上げる己の声以外、物音一つしない現状に、最悪の事態を想像したのか、顔を青ざめさせていく。

それに薄く微笑んで、言葉を紡いだ。

「誰も死なせません。貴方も……俺が守ります」

迷いの無い、曇りの無い視線に射貫かれ、呆けたように男の動きが止まった。

「《神風流りて神光指し》」

そこに朗々と紡がれるのは小さな相棒の声だ。それに答えるように手の中にある剣に詰め込まれた石が光を放つ。

「《清め焰流りて闇魔を討つ》」

相棒の声に答えるように紡げば、体中が総毛立つ感覚に襲われる。

悪魔。そう呼ばれるものを倒すためには仕方のない過程だと分かっているが、この嫌な感じはおそらく決して慣れることは無いだろう。

己の持つ容量限界ギリギリの炎を無理矢理吸い上げられるこの感覚が平気になれば、それは生物としての生存本能の欠損に他ならない。

己の中をスツカラカンにされるのと引き替える様に鮮紅色^{ルビ}の剣は眩いばかりの光を解き放つ。

それと対峙するここのドン……正確にはその彼に取り憑いている悪魔が、目に見えてビクついた。

明らかに動きが悪い。

「……っ！ 狗がっ……!!」

逃げようとする相手を一睨みすれば、動くことさえ出来ないのか、恐怖に顔を歪めてこちらを見据えていた。

「……チエック・メイト」

光の軌跡を残しながら剣で絵を切りつける。

その直後、男はまるで糸が切れたかのようにその場に倒れた。

「……大丈夫か？ 空^{チエロ}」

相棒の声に頷いて、空^{チエロ}と呼ばれた本人は、覚束無い足取りで今し方己が切りつけた絵の足下にしやがみ込んだ。

「……見つけた。駒の欠片だ」

呟いて立ち上がった空^{チエロ}が、開いた手の中にあっしたのは、白い石の破片だった。駒の欠片。そう呼ばれたそれを見て、相棒……空^{チエロ}の傍らにフヨフヨと浮かぶ、こびとサイズの白翼の天使がうんざりとした様子でぼやく。

「小せえなあ。あれだけやって、たったこれっぽっちかよ」

つい口を曲げてしまう相棒に、漸く空^{チエロ}も微かな笑みを浮かべた。

「あの程度の相手だったんだ。予想は出来てたさ」

でもよおと、まだ不満げな彼を軽く撫でながら、一人歩く空^{チエロ}に漸く天使も後を追うように飛ぶ。

「仕事は終わりだ。……帰ろう。アクセス」

一夜明けたイタリアンマフィア、ボンゴレ本部にて、荒々しく足音が響き渡った。

「十代目！ 申し訳ございません!!」

時間はまだ朝。丁度朝食を摂っていた俺……ボンゴレ十代目、沢田綱吉は、入ってきた途端に垂直九十度のお辞儀を繰り出した右腕、獄寺隼人の姿に、思わず咽せて咳き込んでしまった。

因みに？ んでいたのは食後の紅茶だったので物的被害はそこまで多くない。

「……い、いきなりどうしたの？ 隼人」

息も絶え絶えになる綱吉の姿に目もくれず、獄寺隼人は続けた。

「昨日もボンゴレ同盟ファミリー所有の絵画を狙う、あの憎つたらしい怪盗 チエロ・ファイナル 空 花を捕らえようと私兵を配備させていたのですが、こちらの張った罫は何故か悉く見破られ、結局掠り傷一つ負わせられませんでした……!!」

無念さを隠しきれないのか、ギリギリと歯を食いしばりながら、隼人は俯いているが。

(そりゃあ、とうの俺にご丁寧已全部教えてくれるんだもん。ギリギリの体力でやっている俺としては避けるよ。勿論)

狙われている本人にして、彼に守られている本人という、何ともおかしな立ち位置に俺は空笑いを溢すことしか出来なかった。

「まあ……次頑張ればいいんじゃない？」

「……申し訳ありませんでした！ 次こそは必ず御前にあのクソ生意気な怪盗のツラ引き摺り出してみせます！」

俺の言葉で元気になってくれるのは良いが、それは無理な事なのでは無いかとは思わずにはいられない。

そう。昨夜あのファミリーに盗みに入った怪盗とは、俺、沢田綱吉なのである。

何で俺が チエロ・ファイナル 空 花と呼ばれる怪盗となったのか、それは話せば長いのだが。

「……何ぼけつとしてやがる。ダメツナ」

拳を握る隼人を見ながら、物思いに耽っていた、俺は俺の右隣……そこに置かれた椅子に座るおよそ五歳程度の少年に目をやった。

「さっさと食べ。この後の予定は分かかってんだろ？」

ちろりと、こちらを見やったのは、嘗て俺の家庭教師だった存在。そして先日からボンゴレ十代目相談役に着任した、俺の頼れる相棒の一人。

「分かってるよ。ヴァリアーとの会談だろ？」

そう言った俺に満足そうに笑う顔には、嘗ての様な薄気味悪さは無い。

(……そう言えば、いつも始まりはこいつなんだよな)

ふとつい先日と、そして彼と初めてあった四年前を思い出す。

(……いつもこいつがいるから、俺は動き出せるのかもしれない)

最も、そんなことを話す気は無いのだけれど。

「分かっているなら良いぞ……獄寺！ テメエもさっさと食っちまえ

！ ボスを待たせんよ！」

矛先を変えたりボーンの説教を聞きながらしながら、俺は数日前の事を思い出した。

(本当に変わったよな。あの時は隼人と二人つきりだったのに)

あの時は漠然と胸の中に空洞が出来ていたように感じていた。

しかし、今は違う。

それは……俺が空チエロ・ファイナル 花となるきっかけとなった最初の話。

俺が仲間全員に、秘密を抱えることになってしまった始まりの話とも言える。

一章 怪盗 空花《チエロ・ファイナーレ》
prolog

その予兆があったのは、いつからだっただろうか。何度考えても、俺には分からなかった。

「十代目。本日の分の報告書です」

聞き覚えのある声に顔をあげると、俺の右腕を自負する見慣れすぎる程傍らに居続けた男が、心配そうな目を俺に向けていた。

「少し、休憩されませんか？ 顔色が良くないです」

敵対ファミリーからはよく、「ボンゴレの狂犬」等といわれる彼だが、俺や、親しい相手しかいないときの彼はまるで子犬のような表情をすることがある。

それは彼がそれだけ俺達を無条件で信頼してくれている証でもあるのだから、俺としても無碍には出来ない。それを知っている上で、お願いの形をとって己の言い分を通そうとするのだから、この数年で彼も随分図太くなつた物だと、喜んでいいのが判別のつかない感慨を抱くこともここ最近のことだった。

「分かったよ。じゃあ、君も付き合ってくれる？ 隼人」

悪戯っぽい笑みを浮かべた俺の言い分なども、長年の付き合い故にお見通しなのだろう。彼、獄寺隼人ごくでら はやとは、笑って頷いた。

ここはイタリア。そこに本部を置く、イタリアの中でも巨大な規模を誇るイタリアンマフィア、ボンゴレファミリーのその本部である。

何故か言葉が重複しているが、それは俺が口べたなせいなので目を瞑って貰いたい。

俺、沢田綱吉は、日本生まれ、日本育ちの元は普通の一般市民だが、このマフィアの創設者にして、若くしてマフィアのボスを引退し、日本に渡ってしまった初代ボス、ボンゴレ一世ブリーモジョットの血を継いでいる、正統な後継者であることから、十代の時に紆余曲折あり、今はこのイタリアの地で、全く似合わないボス業に就いている。

「……って、今も一応十代だった」

側近にして、マフィア教育を受け始めた当初から、一番の部下……右腕として、また身近な友達の一人として俺を支え続けて来てくれた隼人の入れてくれた紅茶に口を付けながら、俺は思いだしたかのように、言葉を零していた。

「……………はい。十代目は御年十八ですが？」

それが何かと首を傾げる彼に笑って、俺は紅茶を卓の上に戻した。「……………うん。何か……………随分遠くに来ちゃったなあって」

そこで浮かべた笑みの意味が何なのか。浮かべた俺にもよく分からない。

『俺はお前を立派なマフィアのボスにするために来たんだぞ』

平凡な日本の片隅にいた俺を、そう言ってマフィアの世界に引っぱっていったあいつと初めて会ったのは、俺が中学一年の十三の頃。

あの時は、絶対継がないって思っていた組織をいつの間にか俺は継いでいた。強要された訳じゃ無い。

脅迫された訳でも無い。己の意思で最後はそれを選んだ。

そこにいたるまでの間に、辛いことも悲しい事も理不尽なこともたくさんあって、それは今でも時々ある。どうにかしたいと思うことがあって、どうにかしなければと考えて、我武者羅にやりかけると時々、周りの皆が助けてくれていた。

(そうやって進んできて、今がある……………けど)

ふと、近頃頻繁に感じる違和感を、俺は隼人に零していた。

「近頃、皆で集まること……………無くなっちゃったね」

無論、ボスである俺が緊急招集をかければ、ほとんどの者達は集まるだろう。しかし、俺が言いたいのはそう言うことでは無かった。

「……………あまり都合がつかないだけですよ。山本や、笹川は今がちょうどシーズン中ですし」

隼人の慰めの言葉に、俺は小さく頷く。気分が沈んでいる自覚はあったが、いつまでも逃げることはできなかった。

俺がボス業に就く以前から、俺は多くの抗争に訳あって巻き込まれてきた。

他ならぬこのボンゴレファミリーの後継者問題。

過去の軋轢からボンゴレに恨みを持っていた者達との間に起きた諍い。

そして、俺の導き手であったあいつの望みであいつの代理として戦った虹の代理戦争。

どの戦いも命がけで、当時はとても恐ろしかったけど、その戦いの終わった後は、なんだかんだと敵対していた彼らとは良好な関係を築けるようになっていたと思う。

そんな彼らとはボスになってからも、手紙のやりとりや電話、時には直に遊びに来てくれたりと、その交流は続いていた。……なのに。

「……皆、変わりないといいね」

この数ヶ月、彼らのどこからも、返答が無い。

それは、隼人と同じく、側近である他の六人でもだ。

「大丈夫です。十代目」

僅かな間を置いて、そつと俺の手を包む暖かい感触が返ってきた。見ると、心配そうな顔を隠しもせずに、隼人は俺の座る椅子の前に膝をつき、俺の両手を自分の両手で包んでいる。

「あいつらは変わりません……誰一人、貴方を置き去りにしたりしない。信じてあげて下さい。十代目」

迷い無く言いきる隼人の手は昔とちつとも変わらない。

それに何かおかしな感じがして、俺は小さく笑っていた。

「ありがとう。隼人」

何も変わらない。その言葉を俺は信じようと思った。

何かが変わる。今思えばこの時既に、俺の中の超直感は、その異変に気付いていたのだ。

既視感^{デ・ジ・キャラ}、と言うものがある。

有り体に言えばどこかで見たような、きいたようなと思うあれだ。率直に言えば、あの後就寝のために厳重な警備が敷かれた奥の奥、己の寝室へ辿り着いた俺を待っていたのは、そんな出会いに他ならなかった。

「あんたが、ボンゴレファミリー十代目、沢田綱吉だな!？」

何者も侵入できないほどの厳重な警備が敷かれているはずのその

部屋にいたのは、どう鼻屑目で見ても人間ではなかった。俺が真つ先に疑ったのが何者かによる幻術による攻撃だが、持ち前の超直感が見事に否定してくれる。

「俺は、準天使アクセス・タイム!!」

そう名乗った天使様とやらは、どう考えてもこびと並みのミニマムサイズ。動きを止めていたら完全に手乗り人形と見まごうべき小ささだ。ばっさばっさと活発に動く白い羽さえ無ければ、まだ何らかの実験や薬によって極小サイズになってしまった人間ではないかと思いつめるのだが、それもどうやら難しいかもしれない。

「沢田綱吉! お前を怪盗にするために来た!!」

『俺の名はリボン。おめえを立派なマフィアのボスにするために来た!』

この時俺は、間違いなく笑っていただろう。

その既視感デ・ジャブは、忘れもしない始まりのあの日に感じたそれ。

これが、新たな非日常の始まりになるのだと俺には確信できてしまった。

これが、俺と、俺の新しい相棒、アクセスとの出会い。

俺が、怪盗になった始まりである。

＃1 自称神様の勅命

状況を整理しよう。

ここはイタリアの中で最大の勢力を誇るイタリアンマフィア、ボンゴレファミリーのボスの寝室である。当然その警備は厳重その者で、ありの一匹でさえ入り込めないほどのもの筈だが。

「……な、何笑ってんだよ？ お前頭大丈夫か？」

そんな部屋の中に何故か入り込んでいる侵入者の方が何故か主である俺の心配をしていた。本来この部屋に入ろうとする奴らの大半って、俺の命を狙おうとする不屈き者の筈なのに、何ともおかしな話だ。

「ご……ごめんね。アクセス、だっけ」

自然と目に堪ってしまった涙を拭いながら、俺は彼が立っているベット脇のミニテーブルの傍らに屈み、彼と目線を合わせた。

テーブルの上に顎を載せれば、ちょうど彼との目線はピッタリだ。これをミニマムと呼ばずにしてなんと呼ぼう。

「それで結局、君は何なの？」

不法侵入者であるはずの彼に、俺の超直感は一っついていない。たとえば危険で無くてもこれは不審者だ。

隼人を呼ぶことは確実なのに、何故か俺は呼ぼうという気にならなかった。

目線を合わせてジツと返事を待っていると、もしや彼自身も勝手に部屋の中に入っていたという後ろめたさはあったのか、少ししどろもどろになりながらも、言葉を紡ぎ出す。

「俺は天使だ。天使って言うのは神界を統治する神によって死した人間の魂から作り出された不思議生命体で、その中でも俺は準天使っていう地位にいる。……この組織で言えば実働部隊？ みたいな感じで……」

「……うん。でー、俺に何のよう？ 何しに来たの？」

この時点で俺には色々突つ込みたいところ満載な内容であったが、あえてその疑問からは一度目を背け、彼に話の続きを促す。

言いにくそうにしている彼には悪いが、さつきその場の勢いで聞き流してしまった言葉は、早めに聞き直しておいた方が良いという俺の判断である。

「神の勅命を受けて、お前の所に来た。頼む！ 怪盗になって、「悪魔」を封印して欲しい！」

「……………」

その直後、二人の間を支配したのは、何とも言い難い静寂だった。

(怪盗……やっぱりさっきの言葉、聞き違いじゃ無かったんだ)

信じるか否かは二の次に、取りあえず俺は彼……アクセスの言葉を受け入れた。

俺の持つ、ボンゴレファミリーボスの血統だけが持つことのできる「見透す力」超直感は、これを偽りでは無いと言っている。

しかし、本人が嘘をついていないからと言って、それが本当とは限らないのだ。

考えられるとしたら、勅命を受けている本人が、上から嘘をつかれているケースなどもある。

(大体……神界とか、神とか……でも)

あり得ないだろうと、思う一方、今までの経験が、あり得ないわけではないと、その考えを否定する。

過去では、リングの炎やボックスは夢物語だった。別の平行世界の未来ではあり得ないと言われていたタイムトラベルが起きたこともある。

俺の身に降りかかったそんな前科の数々を考えれば、神様がいて、その勅命を受けた天使が尋ねてきて怪盗をやってくれと頼み込む。

色々と突っ込みたいところも無いわけじゃ無いが、誰が、何をどのようにと、一部でも分かっているだけ大分マシなのだ。今までとは。

(でもこれ全部……裏付け何てとれないんだよな……)

そんな不安要素さえ無ければ。

「……………話は分かったけど、何で俺？」

取りあえず会話を進めるために、突っ込みたいところ第一位に俺が認定していた疑問から、俺はアクセスと言う自称天使の少年に投げつ

けた。

取りあえず俺が聞く耳を持つとうとしてくれている事に安心したのか、アクセスは少し肩から力を抜いて口を開く。

「えつとな……悪魔を封印できるのは、本来ならばある特殊な魂の持ち主である少女だけなんだけど」

「ちよい待て!! その時点で矛盾してるよねえ!!」

目の前にいる天使様から漏れた言葉に、反射的に彼を手で押し掴んだ事はどうか許して欲しい。しかし、俺にも譲れないものはあるのだ。確かに俺は筋肉があまりつきにくい体で、東洋人であることと、顔立ちが母親譲りの童顔であることも相成り、周りからは格好いいだの凛々しいだのよりも可愛らしいと言われる割合の方が明らかに多いが。

「俺男だからね!」

「分かってるわ! んなことは!!」

反射的に力を込めた右手の中でアクセスも暴れながら言い返す。

「だから言ってるんだろ! 本来ならばって!」

暗に現状は例外だと言い含めるアクセスに、彼には悪いが俺の中の彼らへの胡散臭さ度は増した気がした。

己だけが例外と言われて、喜べるほど、マフィアの世界は甘くはない。何か裏があると考えるのが妥当である。例えば……。

「もう一度聞く。何で俺だ?」

例えば俺の持ち物の中で、奪いたいものがある、等だ。

そして誠に残念なことに、俺には一つだけ、神を自称するような奴が欲するような己の持ち物に、心当たりがあった。

(トリニセツテ……! まさか、それが目的か!?)

トリニセツテ。それはこの星を正しい方向へ成長させる為に、チエツカーフェイス達、俺達の人種よりも前の時代からこの星で暮らしていた「真性」の地球人達が守ってきた装置を、二十一個の欠片に分割したものである。

その中でも、縦の時間軸と呼ばれる時間を司る七個の欠片は、適合者であった初代ボスのジョットから百年の間、このボンゴレファミ

リーで守られてきたのである。

そして縦の時間軸の要となる大空のリングは、今も俺の指に光っている。

俺の殺気混じりの声と態度から、状況が己の不利な方へ進んでいると分かったのだろう。慌てた口調でアクセスは続けた。

「あ……特殊な魂を持たない人間で、悪魔を封印できるのは高純度の大空属性の炎を持った、純潔な子どもだけなんだ!!」

「何で？」

厳しい声音を変えることなく、詰問を重ねると、その気迫に負けたのか、アクセスは言葉に詰まりながらも答え始める。

「そうでなきや、封印途中で、逆に悪魔に取り憑かれて、体に乗っ取られるんだ。高純度の大空の炎が持つ、強力な浄化能力だけが、特殊な魂……神から力を授けられた魂と同等の聖気の変わりとすることができるんだ」

「へえ……でもさ。高純度の大空の炎なら、俺の他にも適任者いるでしょう？ 何で俺？」

俺の言葉に、目に見えてアクセスの体が縮こまっている。

しかしここまで聞かなければ、俺が納得できないのだ。最もそれで信じるかどうかはまた違う話になりそうだが。

（高純度の大空の炎なら、俺以外にも二人ほど心当たりはあるんだよなあ……）

その内の一人は少女だ。そもそもの例外で無い括りが女性ならば、彼女が選ばれるのが妥当だろう。

（それに彼女、元とは言え、大空のアルコバレーノだし。巫女の家系だし、どう考えても適任あっちじゃん）

膨らむ疑心を表すように、向ける視線もジト目になってしまう俺に気づいているのだろう。

しどろもどろな様子でアクセスは続けた。

「だから言ってるだろ？ 純潔な子どもだって。つまり……二人ともその」

そこで言葉に詰まったアクセスの顔は、何故か真っ赤に染まってい

て。

そこで俺はまさかと、アクセスが口ごもった理由について、一つの可能性を導き出していった。

(え? もしかして、こいつの上にいる自称神様って、そんなことまで分かるの?)

プルプルと、体を震わせて、言葉を紡ごうとするアクセスの姿は、見ていてまるでこちらが虐めているような罪悪感を抱かせる。

彼の上にいるであろうものが何者かは分からないが、少なくともアクセスは嘘をついていない、それは俺の超直感が何よりも証明している事実だった。

(いや、でもさ、俺より年上の白蘭は分かるけど……ユニも?)

純潔で無い、と言う括りを付けるには、その少女はあまりにも幼いのだ。たしかまだ、十を過ぎた程度の年齢だったはずだ。

「いや、だからな。……純潔を無くすって言うのは、神の加護を持たない普通の人間だと……」

チラリと、そこで俺に目を向けたアクセスは、僅かに目尻を赤く染めながら、小さく囁くかのような声で、言葉が続けた。

「自分で……その、……自分の体を……まあ、するだけでも、ダメなんだよ」

「……………」

そこに広がったのは、何とも言えない空気だった。

赤面し続けるアクセスに、顔を引きつらせる俺。

プライバシー保護などどこ吹く風なその神様に恨み言を零せばいいのか、若しくはあまりにも早い少女の性的行動に苦笑いすればいいのか。

(曲がりなりにも普通じゃ無いのかなあ……この世界って)

一周回った思考が着地したのは、諦観だった。

「そ……それでさ。あの……」

言いにくそうにするアクセスには悪いが、俺の意見は既に決まっていた。

「却下。その……自称神様に、失敗したって伝えてくれない? そんな

でお前はさっさと部屋から出てけ。情けで部下には報告しないでやるから」

そう言いきってからの俺の行動は早かった。目を丸くする彼に構わず、むんずと彼の体を掴んだまま一直線に寝室に付けられている小窓を開け放ったのだ。

「ちよつと待て！ 俺は素直に話したろ！ 何で引き受けてくれな
いんだよ!!」

「話せとは言ったけど、話したら引き受けるとは一言も言っていないし、お前はともかくお前の上にいる奴らが信用できない！」

俺でも滅多にしない、外面十割の満面の笑みで追い出した唯一の窓を閉めて鍵をかける。さて寝ようと踵を返した俺は悪いとは全く思わなかった。

リボーンに鍛えられてボス業を継いで、俺とて、単なるいい人でいられたわけではないのだ。ボンゴレという巨大なファミリーの要になっていく以上、非情な決断をしなければいけないこともある。

哀れみや、同情……そんな感情だけで動くことはもう出来ないのだ。

「悪魔の気配はこの敷地内からも感じるんだ！ お前の大切な奴らに取り憑いている可能性もある！ 封印できるのは、お前だけなんだぞ
!？」

窓枠で必死に言い募るアクセスの声から目を背けて、耳を塞いだ。
単に逃げたかっただけなのかも知れなかった。

#2 元家庭教師の来訪

イタリアンマフィア、ボンゴレファミリー十代目の右腕、獄寺隼人の朝は早い。

彼の朝の日課は起床後、軽いランニングがてらの見回りから始まる。

事務が苦手な者が多い十代目守護者達の中で、十代目の傍近くに仕える関係もあり、どうしても獄寺は事務仕事が多い割合となってしまう。しかしそれで体が鈍り、いざという時に十代目の守護に支障を来してしまつては守護者の名折れである。

そんな理由と実益を兼ねたランニングはボス業を主である綱吉が継いでから……もう一年近く続けていた。

ランニングを終えた獄寺は出発する際に持って出たミネラルウォーターで水分を補給しながら、主の起床前にも関わらず、随分屋敷が騒がしくなっていることに気付いた。

近くにいた給仕の人間にウォーターボトルを返しがてら尋ねると、彼女からは思いもよらない言葉が返ってきた。

ピーピーピー

耳元で何度も同じボタンを押しているような、そんな電子音が聞こえた。

やけに大きなその音は、どこか俺の心をざわつかせ、おかしい感じにさせる。

ぼんやり夢心地な思考で、起きないと俺は思案を始めていた。

電話だったら出なさいいけないし、目覚ましだったら止めないといけない。

(あれ? でもいつも隼人が起こしに来るから俺目覚ましなんて一つもこの部屋には置いてないし、ボスになつてからは隣の部屋に必ず人が詰めてる生活だから電話だつてもう持ち歩いてないんだけど……)

不審に思いながらも、途切れる様子も無く鳴り続けるそれにいい加減俺の我慢も限界になる。布団から出るのは癪だが、ここは大人しく出て、鳴っている音を止めてから二度寝しよう。そう決意して、目を

開けようとした俺は……その瞬間、強烈な殺気を感じて飛び退いた。次に俺が受け取った刺激は、今まで俺が横たわっていた地点に、ジリツという音と共に発生した、何かが焦げたような匂い……サイレンサー付きの銃による発砲が行われた証拠である。

「ほう。安心したぞ。まだ感は鈍つてねえみてえだな」

隙間が空いていた扉を開き、そう俺に声をかけてきたのは、まだ五歳にも満たない幼い少年だった。

虹の代理戦争……それは今から四年前のこと。俺がボス業に就く前に、最後に関わった大規模な戦闘で、その内容は、嘗て「最強の7人」という呼び名を冠された、七人の「最強の赤ん坊」アルコバレーノの代理人が、彼らが主催者である鉄仮面の男、チエツカーフェイスにかけられた、虹の呪いを解くためにバトルロワイヤル方式で、戦いあうと言うものだった。

勿論うまい話には裏があるという格言通り、主催者の狙いはその呪いを解くことでは無い。

彼らの人脈を使って、新たに呪いをかける次の「最強の7人」を選出させる為の猿芝居だったのである。

その行為はその一度だけで無く、俺が生まれる遙か前から何度も繰り返して行われていたもので、中にはその呪いを受けながらも生き残った者達もいた。それが「マフィア界の法の番人」と呼ばれてた復讐者である。

彼らはチエツカーフェイスが自ら次の「最強の赤ん坊」を生み出すために呪いをかけるタイミングで、彼に一矢報いる為に、無断で虹の代理戦争に参加した。

彼らはチエツカーフェイスを殺すために、当時呪いにかかっていた七人を道連れにしようとしたのだ。

俺はそれに反発し、彼らの野望を阻止するために、他の六人の代理人達と合同で連合を作り、復讐者達に打ち勝った。

また、新しく呪われるものを出さないためにも、何人かの人々の力を貸して貰ったのだが、そこは長くなるので割愛するでしょう。

とにかく、そうして、新たな呪いの犠牲が生まれることも無くなり、

役目を終えた当時のアルコバレーノ達も、呪いを解かれ……成長を始めた。

その一人がここにいる彼、リボーンである。

「……というか、リボーン。俺が気付かずに銃が当たっていたら、お前はどうするつもりだったんだ？」

「そんな時はおめえが死ぬだけだぞ。俺に殺される程度の実力なら、抗争でも余裕で死ぬだけだろうからな」

フツと、シビアな笑いを零す家庭教師は、いつの時代も俺に関しては嫌になるほど厳しい。最もそうして貰わなければ、ここまで生き残ることは出来なかったであろうという自覚がある俺には、文句など言えるはずも無い。

そんな事を考えていた俺に構わず、リボーンは顔を顰め、「それで……」と続けた。

「さっきからピーピーピー喧しいが一体これは何の音だ？ 昔みてえに夜寝ながらゲームしてたんじゃないやねえだろうな？」

些か呆れたような口調で例えとしてあげたのは、今から四年前はよくやっていた行為で。

暗に「成長していないのか？」と詰られているのと、同じである。「あのなあ。いくら俺でももうそこまで子どもじゃ無いつてのー！」

そう声を荒くする俺に、どうだかなと鼻で笑うリボーン。怒りを覚えつつもいつも通りの彼に俺は少しホツとする。

俺がボンゴレファミリー十代目を継いだ時に、リボーンと当時のボンゴレ九代目が交わした俺をボンゴレ十代目に育てるという契約は終了した。

元からリボーンは、ボンゴレ所属の人間ではなく、あくまでフリーでボンゴレに雇われていただけという立場。

契約が解ければ自然と、その縁は切れるのが道理というものだろう。そうして俺の予想通り、リボーンは滅多にボンゴレへ……俺の元へ足を向けなくなった。

そのリボーンが何の連絡も無く、いきなり現れこの言いぐさなどだから、怒るよりも変わりない姿にホツとしたと言うのが正しいのでは

無いだろうか。

しかしそんな俺個人の感傷など、この唯我独尊我が道を行くが標準装備のリボーンに、考慮して貰える筈がなく、物思いに耽っていた俺は米神に当てられた冷たい鉄の塊の感触で、現実を……無論、彼が怒りを抱いているという危険な状態である事を思い出した。

普通なら、自分よりも体の大きな相手に銃など向けることは出来ないだろう。

しかしそこは嘗て赤ん坊であったことの数少ない強みか。何せ彼にとつては、あの頃己よりも大きな体は当たり前である。

当然五歳児になった現在においても、そのハンデは大して変わらなく……結果、子どもの体で大人を圧倒すると言う仰天事件が起きるのだ。

「ボ、ス。俺が何を言ったか、分かっているな？」

ちやきりと当てられた銃口が、冗談では無いことを示している。現実に戻った耳には確かに何から発せられているのかは分からないながらも、朝から止まることの無い、ピーピーという音が鳴り響く。

よくよく耳を澄ますと、それは俺の寝台のすぐ近くから聞こえてくるようだった。

何度も銃で小突いてくるリボーンに、急かされるように辺りを探ると、その音源は直ぐに見つかったが。

「……何これ？」

「往生際が悪いぞ。やっぱりガラクタじゃねえか」

カチリと、撃鉄を起こす音に、思わず俺は非難の声をあげる。

「ちよつと待つてよ！ 誰が置いたのかは知らないけど、これ俺のじゃ無いって!!」

そう言い募る俺が掲げて見せたのは、掌サイズの十字架だった。

いや、バランスが大分悪いので、一見十字架のように見えるもの、よく見ればこれは小刀の形をしているようだった。

ルビーのような鮮紅色のガラス製で、握っている手はピンヤリとした冷たさを伝えている。

鞘に入った状態を模して作られているが、刀としての形は前述の通

りどこか不均一だった。

刀の切っ先―鋒みねから持ち手―茎なかじまでの部分……平たく言えば縦の長さ、鑢つばの端から端までの横の長さが、同一なのだ。

さながら、十字架を模しているかのよう。

「ふざげんなー！ テメエじゃなきや誰がここにものを置く！ この部屋は基本ボスにしか使われてねえんだぞ?!」

強い口調で詰問するリボーン表情は以前見慣れたポーカーフェイスと異なり、どこか苛立っているようにも見える。その理由は俺には分からなかったが、長年の習慣から余計な刺激しない方が良いことは分かる。

リボーンを苛立たせていた音源を見つけたには良いものの、一向に止める気配が無かった俺にも非があったのかもしれない。

今にも引き金を引きそうなりボーンを何とか宥めながらも、根本的な原因である音を止めようと手に持つそれをいじくり回すが、ボタンの一つも見あたらない。

目に見えて狼狽える俺にとうとう堪忍袋の緒が切れたのか、リボーンの指は迷うこと無く引き金を引いていた。

死ぬ気弾を撃たれたことなら何度もある。しかし純粋な殺気を帯びた目で睨まれ、実弾の銃を向けられた経験は気づけば一度も無かった。……だからこそ俺は避ける事が出来なかったのだ。

頭の中で鳴り響く超直感が、何かがおかしいと訴えていたのもあったのかもしれない。

サイレンサー付で銃声が消されていなかったら、今頃警備の人間が雪崩となって押し寄せていただろう。

さて、撃たれたはずの俺が何故？ 気にこんな言葉を並べられているかと言うと。

「全弾、外されてる……!」

そう。部屋中穴だらけにはなったものの、俺自身には掠り傷一つ無い。因みにリボーンは銃をぶっ放す事で気が済んだのか、既に俺の視界からは消えていて、あの音もいつの間にか止まっていた。

「た……助かったあ」

しかし俺の体は、突然襲われた緊張の連続で糸が切れたのか、へ口と体から力が抜けていた。

できればこのまま再びベットにダイブしたい所だが、残念なことにそれは難しいと言わざるを得ないだろう。

時というのは無情である。

(……というか、本当にこれ、何なんだ?)

一息つきながら、改めて俺は手の中にあるガラス製の一品に意識を戻した。

昨日の朝までは無かつたはずだ。それは間違いないだろう。

そして俺は、こんな壊れ物を部屋に持ち込んだ記憶は無い。しかし。

(……昨日の夜、思い当たるものがあると言えば……)

そこまで考えた俺は、ふと視線を感じ、窓の外を眺め……それを見つけた。

「よっー!」

邪気の無い顔で片手をあげる、自称天使様を。

己はあまり良い印象を持たれていない。だからこそどうするかを思案したアクセスはなるべく親しみさを持たれるように、フランクに接してみようと試みて……現在死に目に会っていた。

「さて……説明、してくれるよね?」

語尾は疑問系になっているが、そこから発せられる雰囲気はどう見ても強要だ。意識するならば、キリキリ話せが適切だろう。

ニツコリと笑う姿は一見愛らしいが、その笑みを向けられるアクセスはその背後に悪魔以上の恐ろしい何かを見た。

「……何か、人選間違ってるねえ? 本当にこいつ、清い心の持ち主かよ?!」

思わず最後には悲鳴をあげるアクセスに、俺は自然と冷めた態度で接していた。

「いや、先ず曲がりなりにもマフィアに清い心求めるそっちが間違ってると思うけど?」

寧ろ、十代の若さでボンゴレの業を継承した俺から見れば、清い心

ではマファイア界では生きてはいられないだろう。

リボーンを含め、あらゆる者から甘いと評された俺とて、敵対する者には容赦することは無い。

それがマファイア界での常識である。

「そんでね。悪いけど俺、君を味方だとは今の所思っていないわけだからさ。話す気無いなら容赦なく拷問するけど……」

良い？と尋ねる前に、アクセスは自ら口を開いていた。

「話しますー！どうか話させて下さい!!」

どうやら天使と言えども、痛みには恐怖を覚えるらしい。

アクセス曰く、その十字架は俺が怪盗となるための専用アイテムであり、同時に武器なのだと言う。

併用で通信機能と、悪魔探索機能もついており、アクセスからの通信が入った時は「ツー」と、悪魔が、若しくは悪魔が憑いた人間が近くにいる時は「ピー」と音が出るらしい。

「……って、ピーならさつき、煩いくらいなつてたけど」

十字架を見ながら俺は呟くが、その答は何となく分かっていたのかもしれない。

「ああ。俺も見ただけど、あのガキ悪魔が憑いてるぞ！ 怪盗の出番だな？」

「ちよつと待てえ!!」

放っておけばとん拍子で話を進めそうなアクセスを引つ掴み、俺が向けたのは疑念の目だった。

頭を過ぎったのは巨大な不信感だ。

あまりにもアクセス達……ひいてはその上にいる自称神様とやらに良い方向に、話が進みすぎている。

(そう。……自作自演を疑っても良いぐらいには……!)

しかしアクセスは嘘をついていない。それは悲しかな、俺の超直感が雄弁に語ってくれている。つまり、彼のいうガキ……リボーンに悪魔が憑いたのは確かなのだろう。問題は……。

「その悪魔を憑けたのがその神様本人じゃないのか？ 俺に怪盗をやらせる為に憑けたわけじゃないって証明をお前はできるか？」

問い詰めながらも俺は内心その答を分かっていた。

「な……！ 何言ってるんだ!! 神様がそんなことするわけ無いだろう!?!」

「聞いているのはお前の感情論じゃ無い。お前が証明できるかどうかを聞いているんだ」

努めて冷静を装いながらも、俺は証明できないことを確信してしまっただ。

唯でさえここに居るアクセスはその神様の配下で上の不正を知ることが難しい立場だ。

そしてこの言動を見る限り、アクセス自身も神様とやたらに全幅の信頼を寄せている。その可能性を考えることさえ出来ない時点で相手にとっては何れほど使える手駒は無いという者だろう。

「十代目？ まだお部屋ですか？」

アクセスと俺しかいない、何とも口を開きにくい故に沈黙が生まれてかけていた部屋の中に声がかかったのは、この時だった。

声を聞くだけで、それが俺の右腕を自称する嵐の守護者、獄寺隼人だと分かる。

「……良いよ。入って」

迷うこと数瞬。

俺の行動は早かった。

「お……おい！ どういうつもりだよ！ 綱吉っ!?!」

ぼけっとしていたところを突然俺の手に捕まれたアクセスは声をあげる。しかし俺はそれを気にすることなく、入ってきた隼人の眼前に突き出したのだ。

「……どうしたんすか？ その手」

それを見た隼人が俺の手と俺を見比べてから困惑も露わに問いかけてくる。

「何って……見て分からない？」

その反応に、困惑したのは俺の方だ。出会った四年前……中学の頃から隼人は不思議なもの……俗にUMAに該当するものに目が無い。自称天使のアクセスなど目の色を変える代物だろう。

しかし俺の予想に反して隼人は困惑した表情のまま、すいませんと謝ってくる。

「その手……どうかしたんすか？ 十代目……はっ！ まさかりボンさんに何か!？」

慌てて隼人が手を開いた瞬間、風を切るかの勢いでアクセスが上空へ飛び立った。

(まさか……)

しかし慌てて手の様子を確認する隼人には悪いが俺はそれどころでは無かった。

隼人の様子からアクセスが単なる悪戯の産物である(にしては最初からかなり手は込んでいるが)可能性がグンと減る一つの仮説に辿り着いてしまったからだ。

「見えてないぞ。普通の奴らには俺達天使は見えないんだ」

「ご丁寧にもアクセス自身がその仮説を証明してくれた。

「大丈夫ですね。……良かった。リボンさんが姉貴にあのような態度を取ってらしたんで、もしや十代目にも同じように接せられたのでは無いかと心配だったんです」

目に見えてホツと胸をなで下ろした様子の隼人の言葉に、俺は目を丸くした。

「え？ ……ビアンキも来てたの？ ……つて言うか、あのような態度……？」

俺の言葉に目に見えて、隼人は慌てていた。まるで俺に言っていない事を言ったというように。

俺はこの時、迷いなく実弾を俺に撃ち込んだ(全弾外していたとは言え)リボンに、最初違和感を覚えたことを思い出した。

「話して。隼人……ビアンキは一体何をされていたの？」

俺の強い口調に引く気はないことは分かったんだろう。

隼人は小声でそれを話し始め。

俺は……嘗ての彼ならば決してしなかったであろうその行為に顔を強ばらせた。

『マフィアは女を大事にするもんだぞ』

ことある毎に彼が口ずさんでいた彼の信条の一つ。況してやビアンキは何年も長く共にいた愛人だったはずなのに。

「ビアンキが体中に青痣拵えていたって……リボーンが、人の前で力の限り蹴りつけてたって言うのかよ……!?!」

顔面から見る見るうちに血の気が引いていくように感じた。

思わず唾を飲み込むと、カラカラに咽が渴いていることを嫌でも自覚してしまう。

「はい。……何とかここでの暴行は俺が間に入って止めて貰ったんですが……そうしたら俺に銃弾が飛んできました……余計な事はするな。それよりも十代目のことをもつとしっかりさせろと、逆に怒らせてしまいました……」

その時の事を思い出したのか、隼人の表情は暗い。俺は隼人に感づかれないように目をアクセスに向ける。

「……悪魔が憑いた奴の性格は豹変することが多い。悪魔は憑いた人間の心を蝕み、己の養分として取り込んでいくんだ」

俺の手が届かないように天井近くの突起に腰掛け、アクセスは俺を睨みつける。

「どうする気だよ。綱吉」

それに続く言葉は想像するのが容易くて、俺は唇を噛み、俯くことしか出来なかった。

「あのガキを助ける為に悪魔を封印出来るのはお前しかいないんだぞ……!?!」

彼らの敷き詰めた、俺を怪盗にするための包囲網は、俺の意思に關わらずにとうに逃げられない物になっていたのかもしれない。